



図版1 懷中持藥入



図版2 藥種切手〔慶應2(1866)年発行〕



図版3・4 貝原篤信『大倭本草』7卷〔宝永6(1709)年 刊本〕

口絵解説

---

## 江戸期のくすり関連資料(日文研「宗田文庫」より)

### 懐中 持薬入

江戸時代の唐物和物薬種売買問屋で妙薬調合も手掛けていた大坂・心斎橋の近江屋安兵衛店が製作・販売した旅行用の携帯薬入れである。封入されている7種の薬「紫金錠、黒丸子、万金丹、奇応丸、真宝丸、安神散、薄荷塩」は当時、胃腸薬や解毒剤、口中清涼剤としてよく用いられたものである。

### 薬種切手〔慶應2(1866)年 発行〕

薬種切手とは、江戸時代末期に薬種(生薬)問屋が仕入れ先の生産者への支払い用に発行した約束手形のことである。宗田文庫には3種5枚の薬種切手があり、いずれも銀壺両を後日支払うことを約束したものである。支払人、銭屋佐太郎のもの3枚、石田清輔のもの1枚、平井屋甚兵衛のもの1枚があり、それぞれ薬草を口にする神王像や恵比寿像が刷られている。これらは、幕末、京都・奈良における生薬の経済流通機構の一端を語る資料といえる。

### 貝原篤信『大倭本草』7巻〔宝永6(1709)年 刊本〕

本書は、黒田藩の儒医としてもその名を知られる貝原益軒(篤信)による本草書である。益軒79歳の宝永5(1708)年に成稿し、翌年梓行、そののち数版を重ねている。益軒は本書で、中国の明代に著された『本草綱目』(1596)などをもとにしつつ益軒独自の分類を加え、1362種にも及ぶ本草の由来や形状、利用法などを詳述している。

(解説: 光平有希)